

セザンヌの資料環境構築の現状

【特集】美術に関する知の蓄積と共有化にむけて

永井隆則

はじめに

フランスの画家、ポール・セザンヌ(Paul Cézanne, 1839-1906)に関する知の蓄積と共有化の作業は、作品総目録、書簡集、伝記、セザンヌが住み制作した場所、文献表(セザンヌに関するエッセイ、批評、学術論文、著作物の一覽表)といった、即物的、客観的データの特定や収集として進められてきたが、画家の没後、一〇〇年以上経た現在に於いても未完である。

本稿では、現在までの蓄積を作業に即して報告しながら、今後の課題と展望についても提言する。

I 作品総目録(カタログ・レゾネ)

セザンヌに関する資料環境の整備はまず、作品総目録の作成から始まった。それは、作品の基礎情報(作品名、制作年、材質・形状、所蔵先、来歴、展覧会歴など)を記載したもので、セザンヌの画業の変遷、セザンヌの美術史上の位置付け、セザンヌ像、セザンヌの生きた同時代の芸術現象の記述など、セザンヌに関わる、あらゆる言説の根拠となる情報源であり、情報が修正されたり追加されたりすれば、それと共に、関連する言説も修正されていく。作品総目録は、セザンヌに関する(知の源泉)である。

その先駆者は、イタリアの美術史家、リオネルロ・ヴェンチュリー(Lionello Venturi, 1885-1961)であった。彼は一九三六年に刊行した総目録『セザンヌの芸術と作品』¹⁾に、一六三四点の油彩、水彩、素描を収録し、各作品に関して、制作年、作品名、寸法、作品に関する記述、複製図版掲載先、所蔵先、来歴及び現所蔵先、複製図版著作権者といった情報を掲載した。さらに、油彩画、八〇五点を年代順に並べながら、四つに(I)アカデミスムとロマン主義の時代(一八五八〜七二)、II 印象主義時代(一八七二〜七七)、III 構成主義の時代(一八七八〜八七)、IV 総合主義の時代(一八八八〜一九〇六)、水彩画、三五〇点は、三つに(I)ロマン主義の時代(一八六五〜七二)、II 印象主義の時代と構成主義に関わる時代(一八七二〜八二)、III 構成主義と総合主義の時代(一八八三〜一九〇六)、素描、三四七点は、三つに(I)アカデミスムの時代から構成主義の時代へ(一八五九〜八五年頃)、II 成熟期の素描帖、III 構成主義の時代から総合主義の時代へ(一八七八〜一九〇六)に分類した。ヴェンチュリーは、セザンヌ研究に様式概念を初めて導入して、作品を分類整理し、客観的に位置付ける視座を提唱した。様式分類は、ベルナル・ドリヴァル(Bernard Dorival, 1914-2003)が一九四八年に発表したモノグラフ『セザンヌ』²⁾でも、再度、採用された。様式は、新たに発見された作品の真贋判断や制作年の推

定に有効な指標となったが、純粹に即物的な科学的データと違って、美術史家の感性的、従って、主観的判断を介した概念であり、絶対的普遍的たり得ない。分析者の主観の介在を前提とする、形式主義、現象学や精神分析がセザンヌ研究の主流となる中で、実は主観的でありながら科学的思考を装う様式研究は疑似科学として廃れていった観がある。

その後の作品総目録は、油彩画、水彩画、素描のメディアに従った、個別的編集に向かい、しかも、様式概念を排除した年代順の即物的配列を採用していく。

油彩画では、一九七五年のサンドラ・オリエンティの『セザンヌの全作品』³⁾、一九九六年のジョン・リウォルド(John Rewald, 1912-94)(ヴァルター・ファイエルヒェンフェルト[Walter Feilchenfeldt, 1939-]とジェーン・ウォーマン[Jayne Warman, 1951-]との共同作業)の『ポール・セザンヌ油彩画総目録』⁴⁾、二〇一四年、ファイエルヒェンフェルト、ウォーマンとデイヴィッド・ナッシュ(David Nash, 1942-)が編纂し開設した『ポール・セザンヌの絵画オン・ライン・カタログ』⁵⁾がある。

水彩画は、一九八三年、リウォルドが編纂した『ポール・セザンヌ 水彩画、総目録』⁶⁾が、素描では、一九七三年、アドリアン・シャピュイ(Adrian Chappuis)が刊行した『ポール・セザンヌ 素描、総目録』⁷⁾があり、いずれもセザンヌ



図1 オン・ライン・カタログ・ホーム・ページ

研究者にとって必携の書として利用されている。

一九九六年に出版された油彩画の作品総目録は、印象派とポスト印象派、中でもセザンヌ研究の第一人者であった、ジョン・リウォルドが、ファイルヒェンフェルトとウォーマンの協力を得て編纂したもので、リウォルドの没後に出版された。リウォルドによってセザンヌの真筆だと判断された全ての油彩画作品がジャンルの分類なしに年代順に配置され、各作品に関して、基本情報に加えて多くの関連情報が掲載され、これが油彩画総目録の決定版となった。

その後、ニューヨークで画廊を営むデイヴィッド・ナッシュがファイルヒェンフェルトとウォーマンに資金

提供する事で、一九九六年の作品総目録のデータを基礎としながら、オン・ライン・カタログの作成を進め、二〇一四年、サイトを開設した(図1)。これは多くの優れた機能と多様なコンテンツを搭載している。

1. サイトには誰でも無料でアクセスできる。
2. 様式分類を排除して、ジャンル別(風景画、肖像画、人物の構想画、静物画、水浴図)に作品が配列され、作品に関わる基礎データが掲載されている。しかも、所蔵先をクリックすれば、所蔵先検索へとスキップして、今度は所蔵先に所蔵される全てのセザンヌ作品を検索できる。
3. 全ての作品がカラーで掲載されており、むろん、拡大・縮小、転写は自由である。
4. カタログに加えて、コレクター、展覧会の歴史、セザンヌ文献表(エッセイ、論文、著作、画集等全てのセザンヌ論を過去から現在まで掲載する事を原則とする)、ヴェラール・アーカイヴ、ヴェンチュリーとリウォルドの旧カタログ・レゾネ番号との対照表、関連図版に関するエントリー(入場)が設けられており、多様な情報検索へと進むことができる。
5. 関連リンクとして、ポール・セザンヌ協会、リウォルド文書、バーンズ財団アーカイヴ、ポール・ローゼンバーグ・アーカイヴ、リオネルロ・ヴェンチュリー・アーカイヴのサイトがはられている。
6. 情報はいつでも、不断に、簡単に修正(加筆、削除)し、更新することができる。

以上、本サイトは、セザンヌ研究に関わる基礎情報並びにその情報源に関わる基本情報を掲載する点で高度な学

術的価値を獲得しているのみならず、デジタル技術ならではの、画期的な利便性、効率性、公共性を実現し、セザンヌに関する知の蓄積と共有化に向けた歴史的な第一歩となった。今後、掲載図版を高画質のデータに差し替えたり、所蔵先等の不明情報を確定し、文献表を充実させるなど、無限に更新されていくだろう。サイトにアクセスした誰もがサイトの改良に協力しうる地球規模でのセザンヌ研究のプラットフォームが構築されたわけである。

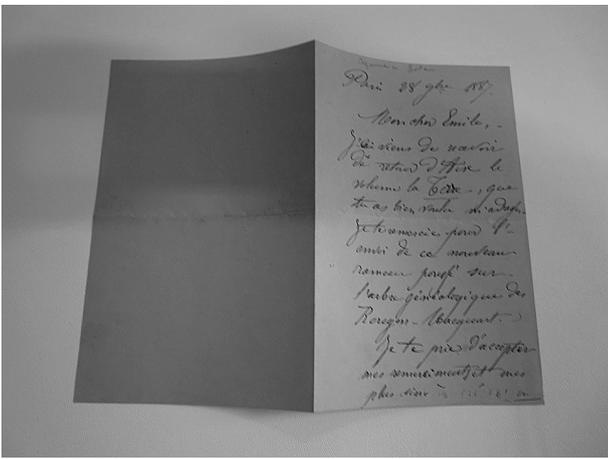
ただし、作品の真贋と制作年に関して、本サイトのカタログ・レゾネは絶対的ではなく、あくまでも作成者による一つの解釈だという事を認識しておく必要がある。作品を購入するにあたって、誰もが当該作品がセザンヌの全てのカatalog・レゾネに掲載されているかどうかをまず確かめ、仮に掲載されていなければ購入を控えるのが一般的である。新しい作品総目録も必然的にそのような権威、権力を発揮してしまう。作品総目録の作成と公開は研究の発展には不可欠の作業だが、大きな危険性を孕んでいる。目録の背後には、セザンヌの作品として認められなかった多くの作品が存在するわけで、そのリストを仮に公開すれば、所蔵者が経済的打撃を受け、訴訟問題にも発展しかねない。リウォルドの研究上の遺産を引き継いだファイルヒェンフェルト、ウォーマンとナッシュは、セザンヌの作品ではないと判断して多くの作品を除外した、彼らなりの根拠を持っているはずだが、それは決して公表されることはない。

なお、このチームは、現在、セザンヌの水彩画と素描のデジタル・カタログの作成を進めており、今後も膨大な作業が予想されている。

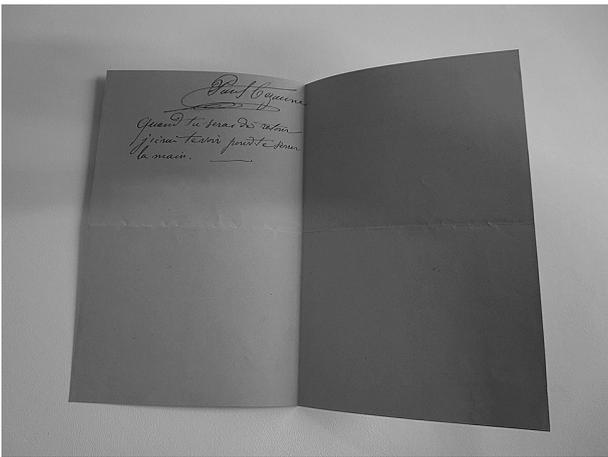
II 書簡

セザンヌの言葉として唯一、信頼に値すると見なされている文章は、セザンヌの手紙であり、彼の生涯を語り芸術観を論じるための基礎資料となっている。

セザンヌの手稿を初めて活字にしたのは、生前、セザンヌと交流のあった、ボン・タヴェン派の画家、エミール・ベルナル(Emile Bernard, 1868-1941)で、セザンヌの亡くなった一年後に『メルキュール・ド・フランス』誌上に、セザンヌから受け取った手紙を公開した⁽⁸⁾。ベルナルの死後、彼の所持していた手稿は売却され、現在、ロンドンのコートールド美術研究所に所蔵されている。その後、一九五五年に同館のダグラス・クーパー(Douglas Cooper, 1911-84)が、二〇〇八年にジョン・ハウス(John House, 1945-2012)が改めて読み直して新版を発表した。



表



裏

図2 1887年11月28日付け、セザンヌからゾラ(Émile François Zola, 1840-1902)に宛てた手紙(©Takanori NAGAI 2016 Sep. 16)手紙と手稿の博物館蔵(現在、閉館中)

一九三七年、ジョン・リウォールドは、自ら調査した全ての手紙を活字化して、『セザンヌ書簡』として一冊の書物に纏めて出版した。その後、ドイツ語、英語、日本語に翻訳され⁽⁹⁾、長らく、リウォールド版が、セザンヌ書簡の決定版として活用されてきた。

ところが、近年、書簡を巡って、にわかに、新しい研究の動きが生まれている。

第一に、新しい手稿の発見である。リウォールドが、一九三七年に編纂した書簡は、実は、全ての書簡を収録した完全版ではなく、新しい手稿が発見され得るという前提の元に作成された暫定版でしかなかった事が明白となった。最近の発見で、セザンヌ研究者を驚かしたのは、一八八七年十一月二十八日付けで、セザンヌがパリから少年時代からの友人で小説家のゾラ(Émile François Zola, 1840-1902)に宛てた手紙が、二〇一三年、サザビーズのオーク

ションで売りに出された事である(図2)。

これまで、一八八六年四月四日、ガルドンヌからゾラに宛てたセザンヌの手紙が両者の間で交わされた最後の書簡だと見なされてきた。この手紙で、セザンヌは、ゾラが贈ってくれた小説『制作(作品)⁽¹⁰⁾』を受け取ったことを知らせ、御礼を書いている。ところが、この小説は、才能はあるが最後には自殺する挫折した画家を主人公としており、リウォールドは、主人公の人物像が一部セザンヌをモデルに造形されていると推論し、その後の手紙が一切存在せず、その後の両者の交流を示す証拠が一切存在しないことから、セザンヌが小説に深く傷つけられて両者の友情が破綻したと解釈した。しかし、一八八七年十一月二十八日付けの手紙が発見されたことで、その後も両者の交流が続いていたことが明らかとなった。その結果、リウォールド説を問い直し、リウォールド説によってゾラがいわば悪者となったために、研究が疎外されてきたセザンヌとゾラの創造的関係を再考する新たな気運が生まれている。例えば、二〇一六年の九月二十四日、セザンヌとゾラの研究者数名が参加して、セザンヌ家の旧邸宅、ジャズ・ド・ブッフアンの大広間でシンポジウムが開催された。全員の発表原稿は、現在、セザンヌ協会ホーム・ページに順次、掲載中である。

リウォールドが書簡の編纂作業を行った時点で、当時、関係者は生き残っており、都合の悪い手紙はリウォールドに提供されなかったはずで、リウォールドの調査網からならず、今も、どこかに未発表の書簡が眠っている可能性は否定できない。事実、二〇一七年三月、セザンヌがシヨケ夫人にあてた手紙が、競売にかけられたばかりである。従って、今後も新しい書簡が発見されて旧来のセザンヌ解釈を揺るがす事態が起こる事は、十分、予想される。

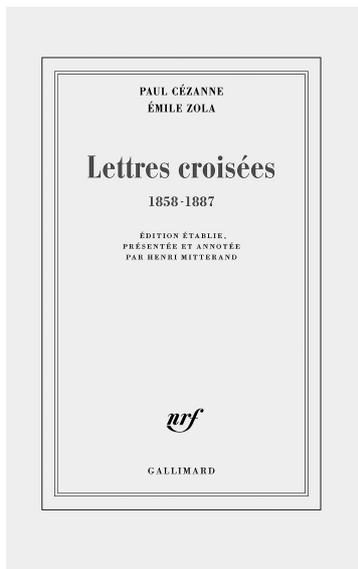


図5 Henri Mitterand, *Paul Cézanne Émile Zola Lettres croisées* 1858-1887, Gallimard, Paris, 2016.

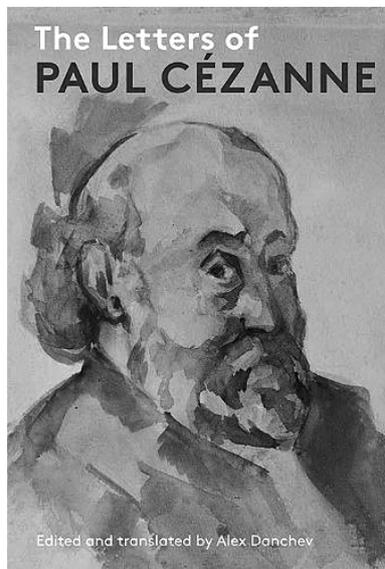


図4 Alex Danchev, *The letters of Paul Cézanne*, Thames & Hudson, London, 2013

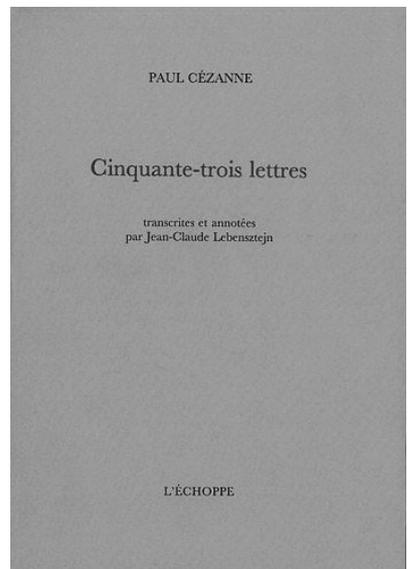


図3 Jean-Claude Lebensztejn, *Paul Cézanne Cinquante-trois lettres*, transcrits et annotés, L'Échoppe, Paris, 2011.

第二に、リウォルド版に修正を加える新版の編纂が相次いでなされた。まず、ジャン・クロード・レーベンシュティン(Jean-Claude Lebensztejn, 1942-)版(図3)である。オースティンのテキサス大学図書館、エクス・アン・プロヴァンスのメジヤヌ図書館、オルセー美術館資料室等に所蔵される手稿を閲覧した中で、これまで誤って読解されてきた手紙三四枚に限って、改めて書き起こして、新版を二〇一〇年春、雑誌『近代美術館手帖』に掲載し、パリの「手紙と手稿の博物館」(Musée des Lettres et Manuscrits, 二〇一五年から閉館中)に収蔵される未刊行の一九通の手紙を追加して、『ポール・セザンヌ 53通の手紙』を二〇一一年に刊行した(図3)。現在も、調査を継続中である。

次に、アレックス・ダンチェフ(Alex Danchev, 1955-2016)(図4)は、二〇一三年、リウォルドの仕事を三十五年ぶりに塗り替えた⁽¹⁶⁾。ダンチェフの最大の目的は、これまで刊行されてきた英訳の間違いを正す事であったが、加えて、リウォルドが収録していなかった、新発見のセザンヌの手紙二片を加え、手稿を可能な限り一から読み直して新解釈を提示し、新しい解題も加えた。また、手紙で言及されたセザンヌ作品を同定し、それらの図版を掲載した。

最後に、ゾラ研究の世界的権威、アンリ・ミトラン(Henri Mitterand, 1928-)⁽¹⁷⁾は、新しい手紙の発見を契機に、リウォルドの読解に修正を加えながら、セザンヌとゾラの間で交わされた一一五通の手紙を収録し、これに膨大な注解と解説付きの人名索引(書簡に登場する人物たち)を添えて、『ポール・セザンヌ エミール・ゾラ 交換書簡 1858-1887』として二〇一

六年に刊行した(図5)。

手稿のアルファベットや言葉、文章をどう認識するかは、読み手の解釈の産物であり、長らく、セザンヌ研究者は、リウォルドの調査結果と解釈を信じて一からやり直すことを来なかったが、レーベンシュティン、ダンチェフ、ミトランは、書簡編纂という作業が実は未開拓の大きな可能性を秘めていること、つまり、手稿の解釈は、どのような事実を事実として主張するのか、どのようなセザンヌの芸術論、どのようなセザンヌの作家像を主張するのかという研究の根本に関わる基礎作業であり、これは今後も続けられ得る開かれた領域だという事を示して見せたのである。

例えば、レーベンシュティン版は、セザンヌ像形成に関わる重要な修正をもたらした。一九〇六年八月二十六日息子宛の手紙の一節をリウォルドは「Je vis un peu comme dans un vide」(私はやや空虚の中で生きている気がする)と書き起こしたが、レーベンシュティンは「Je vis un peu comme dans un rêve」(私は多分に夢の中にいるような気がする)と読み直す⁽¹⁸⁾。前者では虚無的なセザンヌ像が立ち現れ、それは、マイヤー・シャピロ(Meyer Schapiro, 1904-96)⁽²⁰⁾が展開したような、病や死に対する不安や孤独の内に制作してその心情を作品に投影した晩年のセザンヌ像と繋がっていく。一方、後者では、「夢」と読み直すことで、晩年の作品が青年期の夢想的作品と関連付けられる。メルロ・ポンティ(Maurice Merleau-Ponty, 1908-61)のセザンヌ論⁽²¹⁾に典型的なように、印象主義以降のセザンヌは自然を明晰に知覚した自覚的画家だというイメージが流布してきたが、この手稿を新たに読み直すことで、レーベンシュティンは、老いとは無関係に、生涯、現実と非現実を行き来する「夢」の創造的働きに身

を任せて制作をしていた新しいセザンヌ像を提示することとなった。

セザンヌ書簡の編纂は、多くの課題を残した未完の作業である。リウォルド版、ダンチェフ版では、手稿が、それぞれ、どこに保管されているか明示されていない。実際、二人とも書簡集に掲載した手紙の手稿の全てについて、その所蔵先を掌握していた訳ではないし、オリジナルの手稿を全て実見して活字化したわけでもない。幾つかの手紙は、手稿あるいは活字化された手紙が複製された書物から活字化あるいは転載されている。現在、セザンヌ研究者の誰一人として、手稿の所蔵先全てを掌握している者はいないはずである。セザンヌとゾラの書簡のみを扱ったミトラン⁽²⁵⁾でさえ、今回の出版のために、全ての手稿を読み返した訳ではない。

全所蔵先を特定し所蔵先一覧表を作成して、研究者一人一人が手稿から読み直せるように、全ての手稿をオンライン・カタログに掲載し、あるいは、全ての公的所蔵機関が、全ての手稿をデジタル・データで公開する日が来れば、画期的な成果が期待できるだろう。

また、現代人にとって、書簡には意味不明の箇所が多々あって、レーベンシュテイン、ダンチェフ、ミトランが行ったように、問題を一層充実させる作業も残っている。

III 年代記、伝記

セザンヌの生涯を辿る年代記は幾度か作成されてきた。最も信頼に値する詳細な資料として現在、参照されているのは、オルセー美術館資料部門元司書、イザベル・カーン(Isabelle Cahn, 1954-) (現、オルセー美術館主任学芸員)が作成した年代記である。これは、一九九五年、パリの

グラン・パレで開催された『セザンヌ展図録』に掲載された。様々な一次資料にあたって即物的事実を掘り起こした成果は、その正確さと豊富さにおいて、リウォルドの実証主義研究を凌駕している。

セザンヌの伝記は、ジョルジュ・リヴィエール(Georges Rivière) (1923)⁽²³⁾、ガースル・マック(Gerste Mack, 1894-1983) (1935)⁽²⁴⁾、リオネル・ヴェンチュエリ(1936)⁽²⁵⁾、リウォルド(1939, 1948)⁽²⁶⁾、アンリ・ペリュシヨ(Henri Prunhot, 1917-1967) (1956)⁽²⁷⁾以来、今日に至るまで、数多く出版されてきたが、最新の仕事として、アレックス・ダンチェフ(2012)⁽²⁸⁾の伝記がある。近代の芸術観において、作者の伝記上の事実と芸術上の問題は無関係であり、両者を関連付けることは方法論上、御法度だとされてきた。近代主義(modernism)⁽²⁹⁾が展開する美術の現場の動向と協同して、批評家や美術史家は、作品の形式主義的理解と解釈を最大の価値と見なし、伝記上の事実は、些末的なものとして軽視してきた。他方、クルト・バット(Kurt Badt, 1890-1973)が一九五六年に発表した象徴主義的セザンヌ論⁽³⁰⁾や一九六〇年代以降に盛んとなる精神分析的セザンヌ論⁽³¹⁾は、伝記上の事実を分析の材料として積極的に取り込んでいった。伝記は、人生論的、性格論的な観点からセザンヌを大衆に理解させるメディアであるのみならず、仮に、人間学的なセザンヌ論を構想しようとするれば無視できない情報となるだろう。人間学的とは、形式のみならず形式を生み出したセザンヌの全存在、セザンヌが生き制作した環境との関係でセザンヌ論を構想する新しい立場である。

IV セザンヌの〈場所〉

①アトリエ

セザンヌが、どこに住み、どこにアトリエを構えて制作したかについては、詳細な調査がなされてきた。セザンヌの生活と制作の拠点は、エクス・アン・プロヴァンスとパリであった。エクスでは、一八五九年(二十歳)から一八九九年(六十歳)まで四十年間、ジャズ・ド・ブッフアンの邸宅にアトリエ(図6)を構え、邸宅売却後の一八九九年、市内のブルゴン街のアパートの三階に引っ越した後、屋根裏部屋にアトリエ(図7)を建造する。

しかし、手狭であったため、一九〇二年、ローヴ街道に二階建ての建物を建てて二階にアトリエ(図8)を設え、亡くなる一九〇六年まで使用した。現在、ジャズ・ド・ブッフアンの邸宅はエクス市の所有であるがアトリエは空室である。ブルゴン街のアパート並びにアトリエも、現在、借り手がおらず空室となっているが、私物であるため立ち入る事はできない。

一方、ローヴ街道のアトリエは、美術館として一般に公開されている。現在もセザンヌの遺品が保管されているが、その遺品目録はミッシェル・フレッセ(Michel Frisset, 1960)現館長によって作成済みである。没後、セザンヌの持ち物の多くが、家族やアトリエの管理に携わった人々によって持ち出されて散逸しており、現在、アトリエで確認される物品は遺品の全てではないし、セザンヌの持ち物ではなかった物が紛れ込んでいる可能性も排除できず、目録は完全な物ではない。アメリカのセザンヌ研究者、セオドア・レフ(Theodore Reff, 1930-)は、実際にアトリエに残された遺品のみならず、セザンヌと生前交流のあった人々(エミール・ベルナル、ジョワシヤン・ギヤスケ



図6 ジャズ・ド・ブッフアン邸宅のアトリエ
(©Takanori NAGAI 2013 Sep. 13)



図7 ブールゴン街23番地の屋根裏のアトリエ(ガラス張りの最上階)(©Takanori NAGAI 2016 Sep. 17)



図8 ローヴ街道のアトリエ
(©Takanori NAGAI 2016 Sep. 18)

(Joachim Gasquet, 1873-1921) アンブローズ・ヴァラール (Ambroise Vollard, 1868-1939) などが残した逸話や思い出をつづったエッセイや書物を調査して、セザンヌが、生前、アトリエに所持していたであろう書物や複製版のリストを作成した³³⁾。この種の調査は、制作の着想源や芸術論の起源を検討するための実証的資料を提供してきた。

その他、セザンヌは、トロネ街道に立つシャトー・ヌワールという城館に一室を借りて、周辺の森の中で制作するために画材を保管したり、アトリエとして使用したが、現在、内部は改装され、当時の面影はない(図9)。

セザンヌは、記録があるだけで、生涯、二〇回以上、エクスとパリを往復し短期長期にわたってアパートを借りて住んだ。現在、パリで暮らした住所が約二〇カ所確認されている³⁴⁾。パリでの滞在の最大の目的は、パリを拠点にイール・ド・フランスの田舎に出かけて自然を描くことにあり、パリの景観を描くことは殆どなかったが、静物画や人物画の制作はパリのアパート等で行った。パリ一八区、エジ

エジップ・モロー街一五番地に立つ芸術家の共同アトリエ住宅(現在も芸術家達が住んでいる)、アトリエ・ヴィラ・デ・ザール(図10)に、一八九八年一月(五十九歳)から一八九九年六月(六十歳)まで入居してアトリエを構え、セザンヌにいち早く注目して作品を買い占め、ほぼ独占販売した画商、ヴォラールの肖像画などを制作した。

フランスのセザンヌ研究者、ドニクターニユ(Denis Couragne, 1947-)は、セザンヌの絵の背景に描かれた壁紙の図柄などを手がかりにして、パリとエクスとの、どのアトリエで作品が制作されたかを、一点一点、可能な限り同定する作業を行った。一見、何の意味もなさぬ作業に見えるが、それは、まず、他の年代記的事実との照合から年次決定に関与していく。さらに、制作したアトリエの場所が特定できれば、作風の変化が、どのような芸術的社会的環境で生まれたのか、変化の着想源をどこに探すべきかといった研究の手がかりが得られることになる。その成果は、二〇一二年、国立新美術館で開催された「セザンヌ―パリとプロヴァンス展」で発表された³⁵⁾。

②風景

印象派の美学と技法を学んだセザンヌは、水浴図や構想画を除いて、空想ではなく、具体的な自然(風景、人間、静物)を目の前にして制作した画家であった。セザンヌが風景画を描いた実景を探し写真で撮影し作品と比較対照する作業は、アール・ローラン(Earl Lorain, 1905-99) (1930)³⁶⁾、リウールドとレオ・マルシュッツ(Léo Marschütz, 1903-76) (1935)³⁷⁾以来、多くの研究者によって継続され、近年では特に、ドニクターニユ³⁸⁾、アラン・モット(Alain Mothe, 1949-2015)とパヴェル・マホトカ(Pavel Machotka, 1936³⁹⁾)が豊かな成果を発表している。デイディエ・ボンフォーール(Didier Bonfort, 1950-)を中心とする「セザンヌの描いた自然保護協会」は、現在、エクス市在住の人々を中心に多くの会員からなるが、彼らの活動もセザンヌの描いた場所の発掘作業に一役買っている。

セザンヌが描いた場所の同定作業は三つの大きな意味を持ち成果をあげてきた。

第一に風景画と実景を比較することで、セザンヌが実景から何をとり、何を捨て、どう変形して絵画を組み立てたか、創造のプロセス並びにセザンヌの視覚構造を明らかにする手がかりが得られる。

第二に、実景が存在する土地の地質、地形、気候にまで考察の範囲を広げること、セザンヌの技法と視覚が形成され変容する契機が何であったのかを考察することができる。晴れ渡った空から乾燥した空気を貫いて降り注ぐプロヴァンスの強烈な光と骨格の確かな地形(図11)が、平塗りの鮮やかな色彩面による風景の単純化や幾何学構成を発明するための創造的触媒となったことはいまや定説となっている。

第三に、実景が存在する地方の風土や文化をも考慮す



図9 アトリエとして使用したシャトー・ヌワールの一室 (©Takanori NAGAI 2016 Sep. 17)



図10 エジェジップ・モロー街15番地に立つ芸術家のアトリエ (©Takanori NAGAI 2012 Nov. 29)

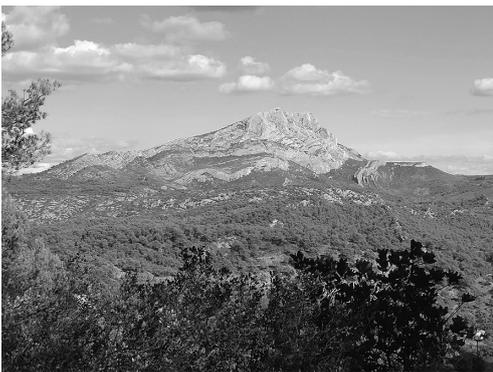


図11 セザンヌの描いたサント・ヴィクトワール山 (トロネ街道から望む) (©Takanori NAGAI 2016 Sep. 17)

生前、交流のあった人々の幾人かが、セザンヌの思い出やセザンヌの語った言葉を記録して、雑誌にエッセイとして、あるいは書物の形で発表してきた。エミール・ベル

V セザンヌに関する文献表

ると、セザンヌの思想を明らかにする手がかりが得られる。例えば、描かれた場所を特定し分類していく中で、急速に近代化が進んでいたパリの都市景観(賑わい、華やかさ、喧噪など)を描かず、周辺のイル・ド・フランスやプロヴァンスの自然(静寂と素材等)を好んで描いたという事実が明らかになるが、これに注目するだけで、セザンヌがマネ(Edouard Manet, 1832-83)や初期印象派と異なる反進歩、反近代化の立場を明確に表明した画家であった事が明白となる⁽⁴¹⁾。

(場所)が、創造のエンジンとしてどのようにセザンヌの制作に関与したか、今後も様々な議論がなされるだろう⁽⁴²⁾。

ナル、モーリス・ドニ(Maurice Denis, 1870-1943)、『ジヨワシャン・ギヤスケ、リヴィエールとシユネルヴ』(R. Riviere/J. F. Schneb, 1879-1915)、『アンブロワーズ・ヴォラール、レオ・ラルギエ』(Léo Largier, 1878-1950)、『ユスターヴ・ジェフロワ』(Gustave Geffroy, 1894-1926)、『ジュール・ボレリー』(Jules Borely)などである。コートールド美術研究所の司書であった、ミカエル・ドラン(Michael Doran)は、彼らの文章の一部を転載・編集して、『セザンヌとの対話』として出版した⁽⁴³⁾。ドランが編纂したセザンヌとの対話集は、日本語や英語にも翻訳されて、セザンヌ研究者の間で広く参照されており、書簡に次いで、セザンヌの言葉として引用される貴重な資料集となっている。しかし、これらのテキストは多くの問題を孕んでいる。テキストを書いた人々は、現代のように、セザンヌの言葉を録音して忠実に文字として復元した訳ではなく、記憶に基づいて執筆しており、記憶違いや誤解もありうるし、何より、彼らの主観、利害が介在している。従って、リウォルド⁽⁴⁴⁾が、ギヤスケの『セザンヌ』(一九二二)⁽⁴⁵⁾に関し

て行った様に、ドランは、ただ文章を転載するのではなく、注釈の形で、文章の信憑性等について詳細な資料批判を行っている。以上のテキストに関する批評研究、つまり、その信憑性や言説の起源、意味に関する検討は、今後も継続される余地が十分にある。

以上のテキストに加えて、現在まで、セザンヌに関する研究論文や著作が膨大に発表されてきた。全世界のセザンヌ論を網羅した文献表は今のところ存在しない。一九九五年にイザベル・カインが「セザンヌ展」の際に作成し、図録に発表した文献表は、それまでにない網羅性を示し、セザンヌ研究史を概観するツールとして今でも有効だが、英語圏とドイツ語圏の文献が中心で、非ヨーロッパ言語で書かれた文献は除外されている。オルセー美術館資料室には画家別、執筆者のアルファベット順に、エッセイや論文が、整理されて、沢山の箱に収納、保管され、一般にも公開されている。セザンヌの箱にも非ヨーロッパ圏の文献は収められているがほんの僅かである。

筆者は、『セザンヌ受容の研究』(二〇〇七)⁽⁴⁶⁾で、第二次世界大戦前に日本人が書いたセザンヌ論を網羅的に調査し分析したが、本書が刊行されるまで、これほど多くの日本人がセザンヌについて語ってきた歴史があることを欧米の研究者は誰一人として知らなかった。

オン・ライン・カタログ(二〇一四)に掲載された文献表は、執筆者アルファベット、年代順に書誌情報を並べているが、全ての言語で書かれたセザンヌ論を、一切、除外することなく、公平に掲載することを前提にして普段に更新中である。今後、これに文献のPDFを貼り付けていけば、セザンヌのサイバー・スペース図書館の開設も夢ではない。



図12 ジャズ・ド・ブッフアの邸宅
(©Takanori NAGAI 2016 Sep. 17)



図13 ジャズ・ド・ブッフアの農家
(©Takanori NAGAI 2013 Sep. 14)



図14 グラネ美術館常設展示室セザンヌのコーナー
(©Takanori NAGAI 2016 Sep. 16)

VI 今後の課題と展望

セザンヌに関する知の蓄積と共有化にむけて、現在、二つのプロジェクトが進行中である。

(1)セザンヌ・オンライン・カタログ(図1)

既述したように、水彩画と素描のデジタル版カタログ・レゾネの作成は、目下、進行中の一大プロジェクトである。所蔵先の特定できない作品が未だにあつて、しかも、個人蔵の場合、売買で、常に移動している。アナログの作品絵目録に掲載された図版には、転載図版も多く、デジタル版では、直接、作品を撮影して得た高画質の画像に順次置き換えて行く事が望ましい。既に完成した油彩画レゾネも同じ課題を残している。更に、セザンヌ個展のリスト、セザンヌ作品が展示された展覧会リスト、各展覧会の記録(出品リスト、展示会場写真、図録情報、入場者数など)、セザンヌが生活し制作した(場所)(地図と現地写真)など、加えるべきエントリーはまだまだ残っている。本サイト

が、セザンヌ並びにセザンヌ研究に関わる基礎データを収集し掲載し続けることで、今後、セザンヌ研究の一大拠点となっていく事はまず間違いない。一九九〇年代以降、世界各国で行われたセザンヌ受容史研究が一段落した後で、セザンヌ研究が、デジタル化、グローバル化時代に相応しい、新しい段階に入ったことを意味する。

(2)ジャズ・ド・ブッフアのセザンヌ研究センター(図12・13)

ポール・セザンヌ協会会長、ドニ・クターニユを中心に、ジャズ・ド・ブッフアのセザンヌ家旧邸宅、並びに、隣接する農家の建物を活用して、セザンヌ研究センターを開設する準備が進められている。そこに、世界中のセザンヌ研究者や学生が集って調査研究を行い、研究成果を学会発表やシンポジウム等で交換し合い、また、セザンヌ展を定期的に開催する事でセザンヌ研究の拠点を作ろうとしている。こちらが目指すのは、アナログの資料環境の構築である。二〇一五年、セザンヌ協会会員のアラン・モット

が急逝したが、生前、彼が収集した膨大な資料が遺族によって協会に寄贈され、現在、クターニユが整理を進めている。また、リウォルドが、生前、親交のあった農家の旧所有者に残した資料群も寄贈されたが、これも未整理である。センターがアナログ資料の拠点であるとの認識が拡がり、寄贈の動きが会員やセザンヌ愛好家の間で拡がれば、センターのソフト面での充実が今後、大いに期待される。

セザンヌ研究センターの構想は、プロヴァンス主義という十九世紀以来のイデオロギーとも結びついている点で、オンライン・カタログ・サイトとは対照的である。

生前のセザンヌは、バリでも故郷エックスでも全く認められなかったため、作品の多くが国外に流出した。フランスでは、印象派美術館(一九八六年、オルセー美術館に吸収される)とオランジュリー美術館が唯一、所蔵するだけで、肝心のエクス、グラネ美術館に所蔵がない状況が長らく続いた。一九八〇年代半ば頃からようやく、グラネ美術館にセザンヌを移管する動きが起こりコレクションの充実が図られ現在に至っている(図14)。

二〇〇六年には、「セザンヌとプロヴァンス」という展覧会⁽⁴⁹⁾がグラネ美術館で開催され、セザンヌ芸術の誕生と展開にプロヴァンスの自然が果たした役割が議論された。セザンヌをプロヴァンスの画家として認知させようとする一連の動きは、エクス市在住のセザンヌ研究者達、クターニユ、ブルーノ・エリー(Bruno Elly、現、グラネ美術館館長)、ジャン・アルイユ(Jean Arrouye、1934)、プロヴァンス大学名誉教授)らが中心となって進められてきたが、「セザンヌとプロヴァンス」展は、ワシントン・ナシヨナル・ギャラリーのアメリカ人学芸員、フィリップ・コニスビー(Philip Conisbee、1946-2008)との共同企画であったし、同年、プロヴァンスでの動きとは全く無関係に、ギ

リシャ人でアメリカ在住の、ニナ・マリア・アタナソグル・カルマイヤー(Nina Maria Athanassoglou-Kallmyer, 1906-、デラウェア大学名誉教授)が、アメリカで発表した博士論文を元に『セザンヌとプロヴァンス 画家とその文化』⁽²⁰⁾を刊行し、セザンヌ芸術が、パリに対抗する、プロヴァンスの自然や文化、プロヴァンス美学やプロヴァンス主義から生まれ展開したとの学説を発表した。彼女の研究は、長らく、形式主義、精神分析、現象学に絡め取られてきたセザンヌ芸術を社会史の観点から読み解く画期的試みであった。従って、(エクスにセザンヌを取り戻せ)という運動は、セザンヌ研究のパラダイム・シフトにもリンクした現場の現実的な動きであったとも理解でき、必ずしも偏狭な地方主義の産物だと片づける事はできない。

センターの構想は、経済的思惑とも結びついている。大学があり気候が温暖なエクス市の住人の多くは、学生と年金生活者、管理職だが、これといった大きな産業が町にあるわけではない。従って、エクス市観光局は、近年、セザンヌを呼び水にして、国内外から観光客を引き寄せるといふ戦略を思い描いてきた。そのために、エクスに残るセザンヌゆかりの地(ローヴ街道のアトリエ、ジャズ・ド・ブッフアンの邸宅、セザンヌが制作したビュッシュス石切場、トロネ街道など)を訪ね歩くガイド付きツアーを整備してきた。センターを作ってセザンヌ研究を振興することは、観光局が進めるエクス市の活性化や経済振興と意識的無意識的に協働している。

おわりに

これまで、多くの研究者が、普遍的なセザンヌ像を構築できるとの前提の下に長らく研究を進めてきた。その理

由は二つある。第一に、少なくとも一九七〇年代末頃まで、セザンヌは現代作家に尚も刺激を与え続けていたため、アクチュアルな画家として批評的言説が意味を持ち続けた。第二に、哲学者、メルロ・ポンティの現象学セザンヌ論が大きなインパクトを持ち続けた事が挙げられる。特にメルロ・ポンティ以後、セザンヌは哲学者や美学者に愛好され、形式主義であれ、精神分析であれ、現象学であれ、歴史性や場所性を超越した思弁的セザンヌ論が展開されるという知的環境が形成されてきた。セザンヌが今なお現代的だとすれば、歴史研究より哲学・美学的研究が重要視される訳で、以上の二点は共犯関係にあった。

しかし、ヴェクスラー(Judith Glatzer Wechsler, 1940-⁽²¹⁾ (1972)をパイオニアとする受容史研究は、セザンヌ像がセザンヌを受容する時代や地域によって多様に変化してきたことを明らかにし、カルマイヤー(2003)が切り開いた社会史研究は、セザンヌが制作した具体的な時と所にセザンヌを置いてその芸術を解釈する新しい視座を提起した。こうして、普遍的セザンヌ像が後退する中で、今日まで着実に進められてきたセザンヌの基礎データ構築作業は、揺るぎない立場として、これから誕生するだろう未知の視点に対しても、不可欠の材料を提供し続けることだろう。

〈図版出典〉

図1 [http://cezannecatalogue.com/catalogue/index.php\(11017年3月七日最終確認\)](http://cezannecatalogue.com/catalogue/index.php(11017年3月七日最終確認))

図2、6、14 © Takatori NAGAI

註

(1) Lionello Venturi, *Cézanne son art-son oeuvre Catalogue Raisonné*,

Vol. I and II, Paul Rosenberg Éditeur, Paris, 1936(Reprinted and published by Alan Wofsy Fine Arts, San Francisco, 1989).

(2) Bernard Dorival, *Cézanne*, Edition Pierre Tisné, Paris, 1948.

(3) Sandra Orienti, *Tout l'oeuvre peint de Cézanne (Classiques de l'art)*, Flammarion, Paris, 1975.

(4) John Rewald (in collaboration with Walter Feilchenfeldt and Jayne Warman), *The Paintings of Paul Cézanne, A Catalogue Raisonné*, Vols. I and II, Harry N. Abrams, Inc. Publishers, New York, 1996.

(5) *The Paintings of Paul Cézanne* On-line catalogue raisonné under the direction of Walter Feilchenfeldt, Jayne Warman and David Nash (11014年11月開設) ([http://cezannecatalogue.com/catalogue/index.php\(11017年3月七日最終確認\)](http://cezannecatalogue.com/catalogue/index.php(11017年3月七日最終確認)))

(6) John Rewald, *Paul Cézanne : The Watercolor, A Catalogue Raisonné*, New York Graphic Society, Boston, 1983/*Les Aquarelles de Cézanne, Catalogue Raisonné*, Flammarion, Paris, 1984.

(7) Adrian Chappuis, *The Drawings of Paul Cézanne : A Catalogue Raisonné*, Vols. I and II, Thames and Hudson, London, 1973.

(8) Émile Bernard, Souvenirs sur Paul Cézanne et lettres inédites, *Mercure de France*, LXIX, 16-X-1907, pp. 606-627.

(9) Douglas Cooper, Lettres autographes de Paul Cézanne adressées à Émile Bernard (1904-1906), *Impressionnistes de la collection Courtauld de Londres (Catalogue d'exposition)*, Musée de l'Orangerie, Paris, 1955.

(10) Cézanne's Letters to Émile Bernard, Transcribed and translated by John House, *The Courtauld Cézannes (Exhibition catalogue)*, The Courtauld Gallery Somerset House, London, 26 June-5 October 2008, pp. 146-165.

(11) *Paul Cézanne Correspondance*, recueillie, annotée et préfacée par John Rewald et ornée de cinquante reproductions en héliogravure, Bernard Grasset Éditeur, Paris, 1937.

Paul Cézanne Correspondance, recueillie, annotée et préfacée par John Rewald Nouvelle édition révisée et augmentée, Bernard Grasset Éditeur, Paris, 1978.

(12) *Paul Cézanne Letters Revised and Augmented Edition Edited by John Rewald*, Translated by Seymour Hacker, Hacker Art Books, New York, 1984.

Paul Cézanne-Briefe, die neue, ergänzte und verbesserte Ausgabe der gesammelten Briefe von und an Paul Cézanne, aus dem Fran-

zösischen übertragen und herausgegeben von John Rewald. Diogenes Verlag, Zürich, 1962.

ジャン・クサンズ・ル・ズーヴ(田浦寿夫訳)『ジャン・クサンズの手紙』日下啓吉訳 昭和十七年。

ジャン・クサンズ・ル・ズーヴ(池田均弘訳)『ジャン・クサンズの手紙』筑摩書房、昭和四十二年。

(22) Émile Zola, *L'œuvre*, G. Charpentier et Cie, Éditeur, Paris, 1886.

(27) Jean-Claude Lebensztejn, Paul Cézanne: Trente-quatre lettres transcrits par Jean-Claude Lebensztejn. *Les Cahiers du Musée national d'Art moderne*, Nr. 111 – Printemps 2010, pp. 82-107.

(25) Jean-Claude Lebensztejn, *Paul Cézanne Cinqante-trois lettres, transcripts et annotations*, L'Échoppe, Paris, 2011.

(9) Alex Danchev, *the letters of Paul Cézanne*, Thames & Hudson, London, 2013.

(5) Henri Mitterrand, *Paul Cézanne Émile Zola Letters croisées 1855-1887*, Gallimard, Paris, 2016.

(21) John Rewald, *op. cit.* [note. 11], 1978, p. 322.

(21) Jean-Claude Lebensztejn, *op. cit.* [note. 15], 2011, p. 10.
ジャン・クロード・レーズジャン・トウセン(永井隆則訳)『ジャン・クサンズの手紙』『美術史』トウセン均弘訳、筑摩書房、昭和十七年。

(20) Meyer Schapiro, *Cézanne*, Harry N. Abrams, INC., Publishers, New York, 2004 (first edition: 1952), pp. 29-30.

(25) Maurice Merleau-Ponty, *Le Douce de Cézanne, Fontaine : Revue mensuelle de la poésie et des lettres françaises*, 6, no. 47, Tome 9, December 1945, pp. 80-100.

Maurice Merleau-Ponty, *L'Oeil et l'esprit*, Gallimard, Paris, 1964.

Charlotte Mou Brailsford, *Cézanne and Phenomenology : A Common Objective* (Master Thesis University of Georgia, 1984), UMI Dissertation Services, A Bell & Howell Company, 1984.

Gottfried Boehm, *Paul Cézanne Montagne Sainte-Victoire*, Insel Verlag, Frankfurt am Main, 1988.

Norman Bryson, *Looking at overlooked Four Essays on Still Life Painting*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1990, pp. 81-83.

Augustin Berque『日本の風景・西欧の景観』ルビノ景観の時代(『建築社現代新書』「新書」一九九〇年)。

Takanori Nagai, Cézanne and Time, *The Great Book of Aesthetics The 15th International Congress of Aesthetics Japan, 2001*, CD-

ROM, 2003.

(22) Isabelle Cahn, Chronologie, *Cézanne (Catalogue d'Exposition)*, Paris, Galeries nationales du Grand Palais, 25 septembre 1995-7 janvier 1996; London, Tate Gallery, 8 février-28 avril 1996; Philadelphia, Philadelphia Museum of Art, 26 mai-18 août 1996. Édition de la Réunion des Musées Nationaux, Paris, 1995, pp. 528-569.

(23) Geroges Riviere, *Le Maître Paul Cézanne*, Henri Floury, Paris, 1923.

(24) Gerstle Mack, *Paul Cézanne*, Paragon House, New York, 1989 (First publication: 1935).

(25) Lionello Venturi, *op. cit.* [Note. 1], 1936

(20) John Rewald, *Cézanne, sa vie, son oeuvre, son amitié pour Zola*, Albin Michel, Paris, 1939.

John Rewald, *Cézanne a Biography*, Simon and Schuster, New York, 1948.

(25) Henri Perruchot, *La vie de Cézanne*, Librairie Hachette, Paris, 1956.

(28) Alex Danchev, *Cézanne a life*, Pantheon Books, New York, 2012

(29) cf. Thomas Crow, *Modernisme et Culture de Masse dans les Arts Visuels, Les Cahiers du Musée National d'Art Moderne*, 19-20 juin 1987, pp. 20-50 (Thomas Crow, *Modernism and Mass Culture in the Visual Arts, Modernism and Modernity*, The Press of the Nova Scotia College of Art and Design, Nova Scotia, 1983, pp. 215-264) / Richard Shiff, *Dream of abstraction 1867-1917, Paths to Abstraction (exhibition catalogue)*, Art Gallery of New South Wales, Sydney, 26 Jun-19 Sep 2010, pp. 53-70.

(20) Kurt Badt, *Die Kunst Cézannes*, Prestel-Verlag, München, 1956.

(25) Theodore Refl, Cézanne's Bathing with Outstretched Arms, *Gazettes des Beaux Arts*, XIX, March 1962, pp. 173-187.

Theodore Refl, Cézanne, Flaubert, St. Anthony and the Queen of Sheba, *The Art Bulletin*, vol. XLIX, June 1962, pp. 113-125.

Theodore Refl, Cézanne's constructive stroke, *Art Quarterly*, vol. XXV, n. 3, Autumn, 1962, pp. 214-227.

Theodore Refl, Cézanne's Dream of Hanibal, *The Art Bulletin*, June 1963, pp. 148-152.

Theodore Refl, Cézanne and Hercules, *The Art Bulletin*, Vol. XLVIII, 1966, pp. 35-44.

Meyer Schapiro, The Apples of Cézanne: An Essay on the Meaning of Still Life, *Art News Annual*, XXXIV, 1968, pp. 35-53/Les

Pommes de Cézanne, Essai sur la signification de la nature morte, *La Revue de l'art*, nos. 1 et 2, 1968, pp. 72-87.

Jean-François Lyotard, La peinture comme dispositif libidinal, *Des dispositifs pulsionnels*, Galilée, Paris, 1973, pp. 238-262.

Sidny Geist, *Interpreting Cézanne*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1988 (栗野春男訳『ジャン・クサンズと解』スカーズド一九九六年)。

Mary Louise Krumrine, mit Beiträgen von Gottfried Boehm und Christian Geelhaar, *Paul Cézanne Die Badenden (Katalog der Ausstellung)*, Kunstmuseum Basel, Eidolon/Shekweizer Verlaghaus, Zürich, 1989/Mary Louise Krumrine, with contributions by Gottfried Boehm and Christian Geelhaar, *Paul Cézanne The Bathers (Exhibition Catalogue)*, Museum of Fine Arts, Basel/Eidolon, Distributed by Harry N. Abrams, Inc., New York, 1990.

丹尾安典『ジャン・クサンズ神話』『美術新報』第四〇巻第四号(通巻第四七二号)一九九九年四月(二四一-二四四頁)。

稲賀繁美『悪魔隠しから独身者の機械』——三人のKと『メトロ』第一巻第一号(一九九一年十一月)九二—一〇三頁。

Hayashi Michio, *Paul Cézanne : The Resistance of Painting (Ph. D. Dissertation, Columbia University, 1999)*, UMI Dissertation Services, Ann Arbor, Michigan, 2001.

Jean-Claude Lebensztejn, Prendre le dessus, *Études Cézanniennes*, Flammarion, Paris, 2006, pp. 81-92.

T. J. Clark, Freud's Cézanne, *Representations*, Nr. 52 (Fall 1995), pp. 94-122 (reprinted in T. J. Clark, *Forewell to an Idea*, Yale University Press, New Haven and London, 1999, pp. 139-167.)

林道郎『精神分析の美術史——文献学的眼差しの効用』『前掲書』(永井隆則譯)(註2)一九一四年「一七—三九頁」。

(23) Michel Fraisset, *Les vies silencieuses de Cézanne*, Office de Tourisme d'Aix-en-Provence, 1999.

(23) Theodore Refl, Reproductions and books in Cézanne's studio, *Gazette des Beaux-Arts*, Vol. 56, 1960, pp. 303-309.

(25) Myriane Assante di Panzillo & Denis Coutagne, *Cézanne et Paris (Catalogue d'exposition)*, Musée du Luxembourg, Édition de la Réunion des Musées Nationaux, Paris, 2011, p. 211, 244, 245, 246, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 253, 254, 255, 256, 257, 258, 259, 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268, 269, 270, 271, 272, 273, 274, 275, 276, 277, 278, 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 289, 290, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 299, 300, 301, 302, 303, 304, 305, 306, 307, 308, 309, 310, 311, 312, 313, 314, 315, 316, 317, 318, 319, 320, 321, 322, 323, 324, 325, 326, 327, 328, 329, 330, 331, 332, 333, 334, 335, 336, 337, 338, 339, 340, 341, 342, 343, 344, 345, 346, 347, 348, 349, 350, 351, 352, 353, 354, 355, 356, 357, 358, 359, 360, 361, 362, 363, 364, 365, 366, 367, 368, 369, 370, 371, 372, 373, 374, 375, 376, 377, 378, 379, 380, 381, 382, 383, 384, 385, 386, 387, 388, 389, 390, 391, 392, 393, 394, 395, 396, 397, 398, 399, 400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414, 415, 416, 417, 418, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 425, 426, 427, 428, 429, 430, 431, 432, 433, 434, 435, 436, 437, 438, 439, 440, 441, 442, 443, 444, 445, 446, 447, 448, 449, 450, 451, 452, 453, 454, 455, 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462, 463, 464, 465, 466, 467, 468, 469, 470, 471, 472, 473, 474, 475, 476, 477, 478, 479, 480, 481, 482, 483, 484, 485, 486, 487, 488, 489, 490, 491, 492, 493, 494, 495, 496, 497, 498, 499, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 506, 507, 508, 509, 510, 511, 512, 513, 514, 515, 516, 517, 518, 519, 520, 521, 522, 523, 524, 525, 526, 527, 528, 529, 530, 531, 532, 533, 534, 535, 536, 537, 538, 539, 540, 541, 542, 543, 544, 545, 546, 547, 548, 549, 550, 551, 552, 553, 554, 555, 556, 557, 558, 559, 560, 561, 562, 563, 564, 565, 566, 567, 568, 569, 570, 571, 572, 573, 574, 575, 576, 577, 578, 579, 580, 581, 582, 583, 584, 585, 586, 587, 588, 589, 590, 591, 592, 593, 594, 595, 596, 597, 598, 599, 600, 601, 602, 603, 604, 605, 606, 607, 608, 609, 610, 611, 612, 613, 614, 615, 616, 617, 618, 619, 620, 621, 622, 623, 624, 625, 626, 627, 628, 629, 630, 631, 632, 633, 634, 635, 636, 637, 638, 639, 640, 641, 642, 643, 644, 645, 646, 647, 648, 649, 650, 651, 652, 653, 654, 655, 656, 657, 658, 659, 660, 661, 662, 663, 664, 665, 666, 667, 668, 669, 670, 671, 672, 673, 674, 675, 676, 677, 678, 679, 680, 681, 682, 683, 684, 685, 686, 687, 688, 689, 690, 691, 692, 693, 694, 695, 696, 697, 698, 699, 700, 701, 702, 703, 704, 705, 706, 707, 708, 709, 710, 711, 712, 713, 714, 715, 716, 717, 718, 719, 720, 721, 722, 723, 724, 725, 726, 727, 728, 729, 730, 731, 732, 733, 734, 735, 736, 737, 738, 739, 740, 741, 742, 743, 744, 745, 746, 747, 748, 749, 750, 751, 752, 753, 754, 755, 756, 757, 758, 759, 760, 761, 762, 763, 764, 765, 766, 767, 768, 769, 770, 771, 772, 773, 774, 775, 776, 777, 778, 779, 780, 781, 782, 783, 784, 785, 786, 787, 788, 789, 790, 791, 792, 793, 794, 795, 796, 797, 798, 799, 800, 801, 802, 803, 804, 805, 806, 807, 808, 809, 810, 811, 812, 813, 814, 815, 816, 817, 818, 819, 820, 821, 822, 823, 824, 825, 826, 827, 828, 829, 830, 831, 832, 833, 834, 835, 836, 837, 838, 839, 840, 841, 842, 843, 844, 845, 846, 847, 848, 849, 850, 851, 852, 853, 854, 855, 856, 857, 858, 859, 860, 861, 862, 863, 864, 865, 866, 867, 868, 869, 870, 871, 872, 873, 874, 875, 876, 877, 878, 879, 880, 881, 882, 883, 884, 885, 886, 887, 888, 889, 890, 891, 892, 893, 894, 895, 896, 897, 898, 899, 900, 901, 902, 903, 904, 905, 906, 907, 908, 909, 910, 911, 912, 913, 914, 915, 916, 917, 918, 919, 920, 921, 922, 923, 924, 925, 926, 927, 928, 929, 930, 931, 932, 933, 934, 935, 936, 937, 938, 939, 940, 941, 942, 943, 944, 945, 946, 947, 948, 949, 950, 951, 952, 953, 954, 955, 956, 957, 958, 959, 960, 961, 962, 963, 964, 965, 966, 967, 968, 969, 970, 971, 972, 973, 974, 975, 976, 977, 978, 979, 980, 981, 982, 983, 984, 985, 986, 987, 988, 989, 990, 991, 992, 993, 994, 995, 996, 997, 998, 999, 1000.

Isabelle Cahn, *op. cit.* [Note. 22], 1996, pp. 528-569.

(25) ズィンター・リト『ジャン・クサンズ展』(展覧会図録) / 国立新美術館「二〇一二年三月二十八日〜六月十一日」。

- (96) Earl Lorran Johnson, Cézanne's Country. *The Arts*, 16-8, April 1930, pp. 521-551.
- (97) John Rewald & Léo Marschutz, Cézanne au Château noir. *L'Amour de l'art*, janvier 1935.
- John Rewald & Léo Marschutz, Cézanne und der Jas de Bouffan. *Forum* IX, 1935.
- John Rewald & Léo Marschutz, Cézanne et la Provence. *Le Point*, août 1936, pp. 1-40.
- John Rewald, The Last Motifs at Aix. *Cézanne The Late Work (Exhibition Catalogue)*, The Museum of Modern Art, 1977, Thames and Hudson, Ltd, London, 1978, pp. 83-106.
- (98) Denis Coutagne, Anna B. Heckendorf-Rewald, John Rewald, Bruno Ely, *Les Siles Cézanniens du Pays d'Aix*. Réunion des musées nationaux. Pays d'Aix, Diffusion Seuil, 1996.
- Denis Coutagne & Philip Conisbee, *Cézanne en Provence (Catalogue d'exposition)*, National Gallery of Art, Washington, 29 janvier-7 mai 2006/Musée Granet Aix-en-Provence, 9 juin-17 septembre 2006, Réunion des musées nationaux. Pays d'Aix, 2006.
- (99) Aïnin Mothe et al, *Cézanne à Auners-sur-Oise*, Édition du Valher-

meil, Val d'Oise, n. d.

Aïnin Mothe, *Ce que voyait Cézanne Les paysages impressionnistes à la lumière des cartes postales*, rrm Grandpalais, Paris, 2011.

- (40) Pavel Machotka, *Cézanne Landscape into Art*, Yale University Press, New Haven and London, 1996.
- (41) 永井隆則「セザンヌの素描と身体—精神分析美術史を越えつ—」『フランス近代美術史の現在—ニュー・アート・ヒストリー以後の視座から』(永井隆則編)『三三社』二〇〇七年、一一九—一六二頁。
- (42) 永井隆則「セザンヌとジャン・ヌ・ポントマン」『場所と読み解くセザンヌ近代美術』(永井隆則編)『三三社』二〇一六年、九八—一三九頁。
- (43) *Conversations avec Cézanne*, Édition critique présentée par P. M. Doran, Collection Macula, Paris, 1978.
- (44) *Conversation with Cézanne*, Edited by Michael Doran, Introduction by Richard Shiff, University of California Press, Berkeley/Los Angeles/London, 2001.
- P. M. シェーパ、高橋高次「村上博談記」『セザンヌ回想』淡交社、一九九五一年。
- (45) John Rewald, *Cézanne Giffroy et Gasquet suivi de Souvenirs sur Cézanne de Louis Aurenche et de lettres inédites*, Quatre Chemins

—Éditart, Paris, 1959.

- (46) Joachim Gasquet, *Cézanne*, Édition Bernheim-Jeune, Paris, 1921.
- (47) Isabelle Cahn, *Bibliographie, op. cit. [Note. 22]*, 1996, pp. 581-587.
- 永井隆則「セザンヌ研究の現在—研究史から見る今日のセザンヌ像 Paul Cézanne (1839-1906)」『マン・ホジウツ「セザンヌ—パリ・トロヴァンヌ」展から見る今日のセザンヌ』(記録集)『国立新美術館編』二〇一三年、七—三三頁、も参照のこと。
- (48) 永井隆則「セザンヌと文容の研究」『中央公論美術出版』二〇〇七年。
- (49) Denis Coutagne & Philip Conisbee, *op. cit.* [Note. 38], 2006.
- (50) Nina Maria Athanassoglou-Kallmyer, *Cézanne and Provence The Painter in His Culture*, The University of Chicago Press, Chicago and London, 2003.
- (51) Judith Glatzer Wechsler, *Major trends in Cézanne interpretations (Ph. D., University of California, Los Angeles)*, UMI Dissertation Services, Ann Arbor, Michigan, 1972.
- Judith Glatzer Wechsler, *Cézanne in Perspective*, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey, 1975.